

『フランス語の学習指針』に基づく授業の評価方法の検証

アサンプション国際高等学校の事例

菅沼 浩子(アサンプション国際高等学校)

野澤 督(大東文化大学)

1. はじめに (大学としての取り組み)

令和3年度教員養成機関等との連携による専門人材育成・確保事業(グローバル化に対応した外国語教育推進事業)において、大東文化大学は『フランス語の学習指針』策定研究会と協力し、研究拠点校3校(早稲田大学高等学院、大妻中野高等学校、アサンプション国際高等学校)で研究授業を行なった。新学習指導要領が掲げる資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等(主に主体的に学習に取り組む態度)」の評価方法に焦点をあてて、『指針』に基づく総合的なフランス語教育、とりわけ異文化理解、主体的態度の育成を促す言語活動を対象とした観点別評価を取り入れることの有用性を検証した。

2. 概要(実践報告)

アサンプション国際高等学校の研究授業の一つでは、「住」をテーマに、グループで1ヶ月パリに行くことを想定し、滞在する住居を選ぶというアクティビティを行った。そのために、フランスの住居に関する映像や家庭科の授業で使用した資料を使いながら、単元目標として次の項目に取り組んだ。(1)住居に関する広告(annonce)を読み取ることができ、間取りについて説明する。(2)自身が希望する住居を選択し、その根拠を伝える。(3)グループで滞在先について話し合い、滞在先を決める。(4)「住」について、家庭科で学ぶ知識と関連づけて取り組む。(5)日仏の住居(タイプ・家賃・宣伝の仕方)を比較する。

これらの取り組みを行う上で、授業後に振り返りシートを記入させることで単元の理解度を把握させ、文化的な相違をより意識させた。アクティビティでは生徒自身が主体的に取り組めるようルーブリックによるパフォーマンス評価を取り入れた。その結果として、住居に関する単語や表現の定着率はどうだったか、また、家庭科の授業とコラボすることで、多くの生徒が文化的相違をどのように理解したか、どのように異文化に関する理解を深めたか、フランス語学習への意欲は高まったかについて検証した。また、日仏の違いや異文化理解に止まらず、グループの議論でどのような発見があったかも観察した。

3. 今後の課題

アサンプション国際高等学校の研究授業では、家庭科と連携したフランス語の授業を実現させることができ、さらに生徒たちが両教科間で取り上げられた知識を結びつけ、主体的に学びに向かう姿勢が確認された。したがって、教科間における知識のつながりを強化した、より印象に残る授業を展開することでさらに効果的な教育が期待できると考え、教科横断的な連携を生かしたフランス語の授業活動の可能性を問いたい。

以上